

---

# 幸せさがし

美鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幸せさがし

### 【コード】

N1291U

### 【作者名】

美鈴

### 【あらすじ】

雨の中来るはずのない待ち人を待っていると、一つの傘が差し出された。

## 八子

6時45分到着の電車を私は待つ。

駅からは電車から降りた人達が家路に着くためにぞろぞろと出てきた。

その中からまっすぐに私がいる場所に向かう姿がある。

グレーのスーツをきっちりと着て、固められた髪を崩すことなくまさに社会人の鏡と言われるだろう人。

私の今の待ち人。

「お帰りなさい。英三郎さん」

「…私の名前は違つと昨日から言っているだろう?」

「いいじゃない。忠犬八子公の飼い主は上野英三郎って決まってるの」

「…君は八子なものな」

「そうよ。あなたが私に言ったんだからね」

## 出会い

彼との出会いは昨日の事だった。

今日と同じ時刻に駅が見える場所で私は座っていた。

その時は生憎の雨で、天気予報を信じて傘を持って来なかった私は当たり前のようにずぶ濡れになっていた。

帰宅ラッシュで、誰もが私を横目で見ながら過ぎて行くのをただ見ていた。

こんな雨の中、惨めに濡れている私にナンパしてくる男もいない。

「……………」

季節は秋。

11月中頃の気温はとても寒く、おまけに雨で体温が一気に下がっていくのを感じる。

でも、私はここを離れる訳にはいかなかった。

…これはケジメなの。

今日で最後なんだから。

「…大丈夫か？」

打たれていた雨の感覚が無くなった変わりに降ってきたのは、落ち着いた男性の声。

俯いていた顔を上げると、グレーのスーツを着た40前後の男性がいた。

彼は心配そうに傘で私に雨が当たらないようにしてくれていた。

「あなたが雨で濡れるよ」

「私は大丈夫だ。それより君が…」

「こんなに濡れているのだもの。気にしないわ」

また私は俯く。

どうせ彼もすぐにここから居なくなるはずだ。

しかし、その予想はすぐに外れることになる。

「…君は誰かを待っているのかい？」

彼は去ることなく、私に傘を傾けたまま聞いてきた。

「え…？」

「まるで忠犬八子公のようにじっと何かを待っているようだったから」

忠犬八子公…。

大学教授の上野英三郎に飼われていて、ご主人が死んだ後も帰りを待ち続けたという犬。

…確かに、似ているのかも知れない。

「そう、ね。私は八千公なんだわ。来るはずがない人を待っているのだから…」

「…来ないのか？」

「5年前に付き合ってた男とここで待ち合わせしてたのに、来なかったの。後で聞いた話だと、私を囚にして他の女と駆け落ちしたって…。惨めな女なのよ、私。まだあの約束に縛られてここで彼を待ち続けている」

なんでこんな話を赤の他人の彼に話しているのだろうか。

いや、もう会うはずがないからこそ聞いてほしかったのか。

「一途なんだね、君は」

「一途？ただの諦めの悪いだけよ」

「いいや、一途だよ。君はただ彼がまだ好きだけなんだろう」

「…勝手な…こと、言わないで…」

まるで見透かされているようだ。

心が見抜かれる。

ただの、通行人で、赤の他人のおじさんに…。

「…とりあえず、話は終了だ。ここにいたら風邪を引いてしまう。送るから傘に入りなさい」

「いいよ。送れる距離に家はないから」

「どこなんだ？」

「この県じゃないのは確かね。近隣でもないわ」

「……………」

彼はそのまま口に手を当てて黙ってしまう。

きっと私の対処に困っているのだろう。

これでこの人もこんな面倒な私を置いていなくなるだろうな。それでも放らなければ、筋金入りのお人好しか物好きだ。

「今日はもう遅いな。君さえ良ければ私の家で雨宿りしていきなさい」

「…へ？」

彼は…筋金入りのお人好しにして物好きだったらしい。

私は名前も知らない年上のいかにも真面目な会社員の彼に手を引か

れたまま、その場を後にした。



## 一夜

私が駅で会った彼に手を引かれるまま、歩くこと10分ほどして一つのマンションについた。

ロビーに入り濡れた傘の水を少し払ってから畳み、彼は郵便物を調べていた。

それを私はただその場に止まり見ているだけ。

それからエレベーターに乗り込もうとする彼は、その場から動かない私を見つけて手招きをする。

「なにをしているんだ。早くおいで」

「…いいの？」

「なにが？」

「ここまで来て言うのもなんだけど、私みたいな女を家に連れてきたなんて知ったら奥さん困るんじゃないの？」

そんな質問に彼は眉間に皺を寄せて「心外だな」と言った。

「私は結婚をしていないから妻などいない」

「…いい歳なのに？」

「君に年齢を言ったかい？勝手に判断されては困るな。これでも3

「7歳だ」

「あら。それぐらいの人は皆結婚してるよ。隠さなくてもいいのに」  
彼は私からして見てもかなりモテる部類に入るだと思っ。

おまけに大人の色気？が漂っているから。

これで高収入なら、もう特定の相手がいても可笑しくない筈だ。

「君はそんなに私を既婚者にしたいのか？……ここで話していても風邪を引くだけだからとりあえず部屋へ行こう。そこに女性の存在がないのを見れば納得するだろ」

「んー。……へ……くしゅ……っ！」

「ははは。これは早く暖まった方がいいみたいだな」

「……お邪魔します」

タイミングのいいくしゃみに救われて、私は促されるままエレベーターに乗り込んだ。

着いたのは5階。

このマンションは10階建てなので、丁度真ん中の高さ。

都会の中心にあるから本来なら夜景が綺麗に見えるのだろうが、雨のせいで全然見ることは出来ない。

彼が部屋の鍵を開け、私は戸惑いながらも入ることに。

「お邪魔しまーす。…あれ」

「どうだ？いないだろ」

「…うん。なんだ。あなたモテないの？カツコイイのに」

「ありがとう。妻はいないが、彼女はいたよ。でもモテていたのかは知らないな」

「いたってことは今はいないんだ。ねえ、過去にどれくらいいたの？」

彼が寝室に向かって、私はずぶ濡れなので部屋が濡れないように玄関で待機した。

とりあえず、服を絞って水を落としながら聞いた。

「なぜそんなことを聞きたいんだ？」

「だって、あなたが私を拾ったのよ。飼い主の事を知りたいと思っ  
ちやうダメ？」

「飼い主…か」

いつの間にかスーツから着替えて、私の為の着替えを持ってきた彼が目の前にきた。

「そう。雨が止むまで私はあなたに飼われる。名前はそうね…ハチ。」

忠犬八千公の八千ね。私のことをそう呼んで。私はあなたを上野英三郎…英三郎さんと呼ぶわ」

「英三郎…いや、私の名前は…ゆ…」

名前を言いかける彼の口に指を添えてその先を止める。

「…ダメ。聞かないから。一夜の関係なんだし、無闇に知らない人に名前を言うものじゃないわ」

「一夜つて…」

「お礼。…私に出来るのはこれくらいだから…」

口に添えていた指を外し、背伸びをして彼の口にキスをする。

驚いたのだろう、彼は持っていた服を床に落としてしまう。

まるでそれが合図だというように私は彼の首に腕を回し、彼も腕を私の腰に回した。

「…ん…、はあ…」

「はあ…いいのか？」

「期待してたんじゃないの？…私は期待してたわ。あなたに女がないから遠慮しない」

「君は…」

まだ彼には迷いがあるように見えた。

きっと私の昔の話を気にしているのだろう。

本当に彼は優しい人なんだろう。

きっと、そんな善意からくる行動に私は知らずの内に惹かれていたのだろうか。

お礼と彼には言ったけど、心の中には確かに彼を想う気持ちがある。

それが『恋』とは違うものかもしれないけど。

「ねえ、何も考えないで。あなたを求める私だけを見て」

彼に罪悪感を与えない為に淫らな女を演じる。

場数を踏んでいるという雰囲気を出す。

彼の頬に添えていた手をずらし首に撫で、衣服の中に手を入れる。

濡れたままの体を押し当てて誘惑する。

「…っ、…いいんだな。本当に」

「そう言ってるじゃないの」

「私を誘って、後悔するなよ」

「しないわ。…来て」

彼の瞳の中に秘めた強い光を見つけて微笑む。

まるでスイッチが入ったかのように抱き合い、まさぐりあい。

そして、一つになった。

\*\*\*\*\*

「…ん、…あ…」

何度求め合っただろうか。

空は赤らみ始めた頃、私たちはやっと休むことが出来た。

とは言っても、乱れたベッドで裸のまま抱き合い、濃厚なキスを未だにしているのだけ。

彼はとても優しく、そして丁寧に私を抱いた。

自分だけを満たすような抱き方をする子供のような男と違い、女を満たすための大人の抱き方。

幾つも経験してきた貫禄がある気がした。

…癖になりそう。

「体は、平気か？」

「ええ…気持ち良すぎよ。腰が砕けて動けないほど…」

「はは。そうか」

最後にキスを一つ落とし、ベッドの下に落ちていたシャツを動けない私に着せてくれた。

彼は下を履いてそのままベッドに倒れ込む。

「もうこんな時間か…、年甲斐もなくしてしまったな」

「明日も仕事、よね。少し寝る？」

「そうだな。君も…ハチも一緒に寝るか」

「ええ。…おやすみなさい」

「おやすみ」

疲れていたのだろう。

彼はすぐに寝息をたてた。

私もそんな彼を見ながらゆっくりと目を閉じる。

なんだか…このまま朝が来なければいいのに。

そんなことを思っていた。





お別れ

ピピピピ...

寝てすぐにアラームがなった気がする。

本当は3時間くらいは寝ているはずなんだけど...

聞き覚えのないアラームに少し眉を寄せてベッドをモゾモゾ動く。

「んん...、うるさい...」

「...ん、もう朝か...」

私と彼は寝ぼけながら起き、私はそのままベッドでぼうつとし、彼は慣れたようにシャワーを浴びに寝室を出ていった。

「雨...止んだ...」

閉められたいたカーテンの隙間から太陽の光が部屋に差す。

外は晴天らしい。

...ここにいる理由も、もう無いんだ。

「ハチ。君も入るかい？そういえば、君は...社会人？」

「ああ、言っていないなかったっけ。私22だから社会人。今は有給を使ってるの」

シャワーから出てきた彼はまだ半乾きの髪をタオルでガシガシと乱暴に拭いていた。

私は見かねて彼を手招きし、持ってきてもらったドライヤーで髪を乾かし始めた。

「22?…15も違うのか」

「あら?なにをそんなに難しい顔をしているの?10代じゃないんだから、犯罪じゃないわよ」

「そういう訳じゃない」

「変なの。普通は若い人と出来て嬉しくなる筈でしょ」

「男がすべてそう思っていないよ。少し複雑なんだ」

「…?私として後悔してるの?一夜のことよ。いい思い出と思えばいいわ」

髪が乾いたのを確認してドライヤーを止める。

「そうか。…一夜。雨はあがっているものな」

「そう。だから、私がここに雨宿りする理由はないわよね」

私はそのままシャワーを借りるためベットから降りようと…したが。

「キャッ!」

ドサ！

「…大丈夫か!？」

裸のままベッドから落ちただけで、彼はすぐに私に毛布をかけてくれた。

そして抱き上げてそのままベッドへと戻してくれた。

「…足が動かない、というか腰が…」

「……………」

「あはは。動けないわ」

「これは…予想外だな」

本当に予想外。

腰が砕けたなんて人生で初めてなんだけど。

「全然動けないのか？」

「…うん。そうみたい」

痛い、というより感覚がない。

これは完璧に歩くことは出来ないだろう。

。。。。

「ああ、もうこんな時間か。私は会社に行くが、君は治るまでここにいればいい」

最後まで一緒にいられないのがとても申し訳ないのかそう言い私に家の鍵を渡した。

「私がない間に帰るのなら、鍵はポストに入れておいてくれ」

「わかったわ。ありがとう。…いってらっしゃい」

「ああ、いつてきます」

彼は昨日初めて会った時のようにスーツをピシリと着て寝室から出ていった。

暫くして玄関が閉じた音が聞こえてから、私はそのままベットに倒れ込んだ。

「理由：出来たかも」

昨日は雨宿り。

今日は歩けなくて。

まだ、一緒にいられる？

横になったことで、寝不足からかすぐに寝入ってしまった。

次に起きたのはお昼過ぎで、足も少しだけど歩けるようになっていた。

シャワーを借り、昨日濡れていた服はいつの間にか洗濯、乾燥されていたらしく綺麗に畳まれておいてあった。

彼はいつの間にしていただろう？

少し不思議に思ってから着替え、居間のテーブルに置いてあったサンドイッチを有り難く貰いテレビを見ることに。

だんだんテレビにも飽きてきた時、時計を見ると時間は5時。

「確か彼と会った時間って…6時くらいだったよね」

昔の彼を待っていた駅で彼と会った。

今日は彼を待つのもいいかもしれない。

「…これも最後かもしれないし」

決めた私は、すぐに駅へと向かった。

彼を待つために…。

\*\*\*\*\*

「まさか君がまだ居たとは思わなかった。もう動けるのか？」

彼はすぐに私を心配してくれた。

それがなんだかくすぐったくて、でもすごく嬉しい。

「まだ長時間は無理ね。でもここまで10分くらいでしょ？大丈夫だったわ」

「でも大事を取って後一日あそこにいってもいい？」と彼に尋ねると、彼はすぐに「いいよ」と返事をくれた。

部屋に帰り、夕飯を二人で作る。

彼は一人暮らしが長かったようで、料理のレパートリーが沢山あった。

女の私より多いなんて…。

今日は簡単にカレーを作った。

「ああ、おいしいね」

「そうでしょ？カレーにチョコを入れるとこくがますのよ」

「ハチミツは知ってたがチョコは知らなかったな」

新発見だとばかりに笑う。

その姿は、なんだか無邪気で可愛く思えた。

私とは15歳も違う大人の男性なのに…。

「じつそつさまでした」

「あ、食器はそのままでもいい。君は休んでいていいから」

「え…でも」

「君はまだ本調子じゃだろ？それに、それは私のせいだからね」

「あ、ありがとう…」

彼の言葉に頷き、リビングにあるソファーに座った。

キッチンから聞こえる食器の重なりあう音を聞きながらテレビを見ていた。

なんだか、こつこつといういいな…。

まったりした雰囲気。

そんな雰囲気酔いに酔いしれている時、ソファーに添えていた手に冷たい金属のような物が触れた。

「？」

何かと思い手で摘まんで見ると、それは片方だけのイヤリングだった。

女物…。

彼女…？

でも、彼は彼女はいないって言ってたはず。

ピリリリ…

「はい。…ああ、君か。…いや、その話は…終わっただろ…」

タイミング良く鳴った電話に出る彼の声。

そして微かに聞こえてくる女の人の声。

『嫌よ！…別れたく…ない…』

別れる…？

もしかしなくても、今の電話相手は彼の恋人の声？

「今から？駄目だ。…なにを言っているんだ」

話からして彼女はここに来たいと言っているらしい。

でも私がいるせいで彼は焦っているらしい。

私は知らないまま、彼を困らせていたのだ。

昨日だって、今を思えばとても戸惑って、私が強引に進めてしまった。

私は…やっぱり誰かを不幸にすることしか出来ないのかな。



ピッ

電話を切った音が聞こえて、また食器を洗う音が聞こえてきた。  
どうしたのだろうか。

彼女は来ることになったのだろうか。

考えに浸っていたせいで内容を聞くことを忘れてしまっていた。

暫くしてから彼は洗い物を済ませ、私の隣に座り一緒にテレビを見る。

「ねえ。英三郎さん」

「…なんだい」

英三郎と呼んで諦めたように返事した。

「ちっきの電話…」

「ああ。聞こえてた？なんでもないから」

「そう。シャワー借りていい？汗かいちゃった」

「いいよ。なら着替え出して置いておくよ」

「ありがとう」

私は逃げるようにその場を後にした。

シャワーを浴びながら考えながら雑念を払う。

私はただ雨宿りでここにいただけ。

お礼に体を重ねただけ。

そう、たった一夜のことなんだ。

彼に特別な感情なんて抱いていない。

昨日会ったばかりのただの赤の他人だ。

それなのに…

なんで胸が痛むの？

ムカムカする、ズキズキする。

きっと彼が優しいから。

私は彼の親切心に惹かれているだけだ。

そうきつと…。

今日彼はなにもしてこなかった。

私の体を配慮してくれてのことらしい。

その代わりに、抱き締め合って寝た。

温かい体に抱きつきながら、私は夢を見た。

あの駅前に座り込み、誰かを待つ私。

沢山の人から駅に出てくるのを見て顔を上げて彼を探す。

やっと見つけたと思ったら、その隣には綺麗に着飾った女性が。

彼は彼女に微笑み、彼女は彼の腕に腕を絡ませて満面の笑みを浮かべている。

私と彼女の姿は月とスッポン。

私は彼らを呆然と見ながら佇んでいた。

しだいに雨が降り私を濡らす。

頬を伝う雫は雨なのか、それとも…。

「…は！…はあ、はあ」

なんて夢を見たのだろう。

ここにいと私は可笑しくなる。

この場所、彼の側にいると私が私でなくなる。

…ここから離れなくちゃ…。

悪夢に魘されたようにびっしょりと汗をかいていた私は、抱きついて  
いた彼から離れ、私に巻き付いている腕を離した。

寝入っている彼の顔を見つめ、そっと顔にかかる髪の毛を払う。

起きない彼の額に唇を寄せる。

チュッ

「…さようなら」

ベットから降りて、部屋から出ていった。

それから

あれから1ヶ月。

私は“忠犬八千公の私”から“人間の私”に戻った。

人間の君嶋深雪に。

私は山に囲まれた場所に住んでいる。

あまり不自由だと思っただけではない。

少し車で移動すれば駅や店などがあるし、なにより私は山が大好きだからだ。

「君嶋さん。今日の飲み会どうする?」

「え?飲み会って…なにかあるんですか?」

今、私は勤めている工場で事務の仕事をしている。

大手印刷会社の工場で、主にお菓子などのパッケージや飲食店の業務用のスープ入れの袋なのを作っている。

彼と会ってからずっと仕事に没頭していたから、話についていけない。

「知らないの?この前から親会社の上の人が来てるの。その人、この工場に来るみたいでちょっととした歓迎会をするんだって」

「そうなの？知らなかった」

「あはは！確かに最近の君嶋さんって周り見てなかったもんね。その人、ここにも挨拶に来たのよ」

「…へえ。でも、上の人なら私たちにはあまり関係ないよね」

「そうなんだけどね。んで、飲み会どうする？会社のお金で飲み放題食い放題だけど？」

同じ部署の気さくな彼女はジョッキを片手に飲む振りをする。

…確かに最近は仕事にかじりついていたら、息抜きも必要なのかな。

「そうだなあ。…出ようかな」

「オツケー！じゃあ君嶋さんも行くつてことで決まりね。あ！場所は会社近くの焼き肉店ね。時間は6時からだから」

それだけを言うとそのまま彼女は持ち場についた。

今は3時だから、後3時間後か…。

仕事を片付けてすぐに制服から私服に着替えて車に乗った。

今日は車だから酒は飲めないから、焼き肉を思う存分食べよう。

飲み会の会場になる焼き肉店に着いたときには、かなりの社員がも

う来ていた。

私は同僚で高校からの友達の塚田祐希がいる奥の席に行く。

「遅かったね深雪。仕事お疲れさま」

「お疲れ。ねえ、祐希は親会社の上の人って見たことある？」

「あーあるある。結構いい男だったわ。歳は40前後くらいでいい色気放ってたの。大体の女は見とれてたわね」

「へえ。…なんだかあの人みたい…」

いや、そんな筈がないわ。

だって彼はこんな田舎に来るはずがないもの。

ましてや私の勤めている会社の人なんてそんな偶然あるはずが…。

「えー大体皆集まったな。今日は高橋祐一郎専務の歓迎会によく集まってくれた。では、改めて挨拶をお願いします」

社長の言葉に前を向くと、重役たちの隣に座っていた一人が立ち上がった。

「…うそ」

私は彼の姿に釘付けになった。

高橋祐一郎専務として挨拶している彼は、1ヶ月前に会ったあの彼

だった。

私を忠犬八子公みたいだと言って、私が上野英三郎と呼んだ人。

「今日は私の為に祝いの席を用意してくださりありがとうございます。これから同じ会社で働くことになるのでどうぞ宜しく願います」

あの時と変わらない落ち着いた低い声。

私は反射的に下を向いた。

「深雪？どうしたの？」

「な、なんでもないわ。ちょっと目にゴミが…」

それから社長の合図で飲み会が始まり、皆各々で騒ぎ始めた。

そんな様子を横目に、私はこの状況を飲み込めずにいた。

彼は私に気づいているのだろうか。

あの電話の彼女とどうなったのか。

突然いなくなった私に怒ってはいないだろうか。

なにもかも知るのが怖い。

この場から、早く離れたい…。



歓迎会と名打った大宴会は、時間に立つにつれて酔っ払いが多くなつていった。

だからこそ、私がある場から離れたことを知る人はいないだろう。

祐希以外は…。

「ふう…」

冬の風は冷たい。

店を出てすぐの壁に寄り掛かりながら、熱気や緊張などで熱くなつた体を覚ます。

まさか、こんな偶然はあるのだろうか。

彼から逃げるように姿を消したことを後悔する。

普通にお別れをしていたらこんな気持ちになどなるはずがなかったのに。

「どんな顔で会えばいいのよ。…いつそのこと、逃げて…」

「また、逃げるのか？」

「…!!…なんで…」

店のドアから出てきたのは間違いなく、さっきまで私を悩ませていた人物。

彼は私を見つけるなり、壁に押し付け逃げられないように拘束する。

「やっと見つけた」

「私を、探したの…？」

「当たり前だろ？あんな突然居なくなったのだから」

「怒ってる…？」

私が問いただすと、彼は困ったような表情をした。

「私に怒る資格がないのは分かっている。あの時限りの関係だからと言われればそれまでだしね」

「でも、怒ってる」

「ああ。そうだな。怒っている。私としては、あのままで終わらすつもりはなかったから」

「え…」

ギョッ

腕が背中に回され、私は引き寄せられるように彼の腕の中にいた。

「君を抱いた時から決めていた。絶対に離さない」と

「…抱いたから？責任を取るといつの？」

「違う」

「違う！あなたはその自分の行動に責任を感じているだけよ。でなきゃ、そんなこと言わないはずだもの」

「…話を聞いてくれ」

「嫌よ！聞きたくない！もう何も話すことはない。離して！」

惨めじゃない。

責任を取らせるためにあんな事をしたわけじゃないのに。

ただの、気まぐれだっただけなのに…。

それなのに、「離さない」と言ってくれたことに喜んでいる私がいるなんて、なんだか何がなんだかもう分からない…。

腕の中で必死にもがいていると、彼は片腕だけで私を抑えてから何かを口に含む気配がした。

それから顎に手を添えられ上に向かせると、いきなり口付けをしてきた。

「ん…！う…ん…」

口を少し開かされ液体を流し込まれる。

反射的に私はそれを飲み込んでしまう。

ゴクン

「…っん!…はあ、はあ…お酒…?」

喉の焼ける感触にアルコールの匂い。

私は彼にお酒を飲まされたいらしい。

「君は車だったのだろうか?これで車は運転出来なくなった。…逃げられないぞ」

「……」

「代行を呼んである。一緒に来てもらうから」

「え…歓迎会はどうするの?主役のあなたがいらないなんて…」

「大事な用があるからと社長には言っている。それに、今は歓迎会というより、ただの宴会になっているしな」

有無を言わさない彼は、そのままその場についた代行に私を乗せて自分も乗った。

「あ、私バック…」

「心配ない。塚田さん、だったかな。彼女に頼んだから」

「…いつの間に」

もしかして、すべて計算された上での行動なの?

祐希への連絡といい、さっきのお酒といい。

流石は37歳で専務まで登りつめただけの實力を持つ人。

侮れない…。

## 好き

彼に連れてこられたのは近くのビジネスホテル。

既に何泊かしているのか支配人らしき人に「お帰りなさいませ」などといわれていた。

「まだこっちに来て日が浅くてね。急だったし色々忙しかったから部屋を借りてないんだ」

そう言いながら通された部屋で、私は一人座り心地がいいソファ―に座っていた。

彼はお酒の口直しにとコーヒーを入れてくれている。

「はい。熱いから気を付けて」

「ありがとう…」

手渡されたカップを両手で包むように持ってから口を付ける。

コーヒー独特の苦い味が口に広がる。

「さて、何かから話そうか。…そうだ、君はあの時初めて私に会ったんだっただね」

「そうよ。あなたもでしょ?」

当然のように聞くと、彼はコーヒーを飲みながら「いいや」と答え

た。

「私は君を見たことがある。3年前からだから…3回かな」

「え？」

「君が待っていた駅は私の降りる駅だ。普通はその場に大勢いる人間なんて一々覚えていられる訳がないんだが、一人座る君がその時は目に入った。駅から出てくる人を目で追って必死に誰かを探していないと気づくと悲しそうな顔をしていた」

あの時の私は、いつか彼が戻ってくるのではないかと約束した日に毎年待っていた。

その時に、見つけてくれていた…？

「初めて見た時は、迷子なのかとそれだけしか思わなかった。次の日には居なくなっていたし…すぐに忘れたんだ。でも、1年後。君はまたあそこにいた」

「…よく、あんな大勢の中で見つけれられたわね」

「それは…自分でもよくは分からないが、私とまるで違う生き方をしている君に惹かれていたんだな。きつと」

必死に何かを探す君と、流されるまま生きている自分。

元彼を探す私を見て、彼は自分の向かうべき道を見直したのだと言う。

流されず、自らで掴み取ることに決めたと。

「感謝しているんだ。君に。君は知らないと思うが、とても感謝している」

「そんな…私は、ただ諦めきれなくて…もう意地になってあの場にいただけなのに」

「そうだとしても、君が私の人生を変えたことに変わりはない。…それから、まあ君の姿が頭から離れなくなっただよ。人生を変えた人だから、と言うわけでもなく…。ただ今君はどうしているだろうかと考えたり…悲しい顔をしていないかとか、ずっと」

「……」

「ある人に指摘されて気付いたんだ。君が好きなんだと。可笑しくないか？名前も知らない、話したこともない、たった2回しか見たことがない女性を好きだなんて。…でも、それが事実なんだから仕方がない」

彼はカップの中身のコーヒーを飲み干しテーブルに置くと、その手を私の頬に添えた。

「あの日、雨が降っていて君に話せる機会が巡って来たのを運命に感じたよ。君に触れて、君を少し知ることが出来て、改めて君が好きだと思った」

「……あの」

「なに？」



「恥ずかしく、ないですか？そんなに、好きとか、言って…」

「本当のことだから恥ずかしくくない。…なんだ、君のほうが恥ずかしいのか？」

真っ赤になった顔を見られて、私はすぐに頬にある彼の手を払いそっぽを向く。

そんな私の行動に笑いが収まらないのか、部屋には彼の笑い声が響いた。

「もう、笑わないでよ…」

「はは…いや、すまない。可愛くてね。まあ、これで分かったと思うけど、君を抱いたから責任を取るとかではなく、君が好きだから一緒にいたいだけなんだ」

彼が、私を好き…？

「君は？」

「私は…、わからないわ。だって会ったばかりじゃない」

「これっぽっちも想ってない？」

「…わからない。…でも、少し惹かれていたのかもしれない…」

一緒にいたいと思ったり、彼女らしき人に嫉妬したり、また会った

時の胸の苦しさ。

そして、好きだと言われた時の胸の高鳴り。

一つ一つを繋ぎ合わせたら、形になる。

私は、彼に惹かれている…。

好きとはまだ認めることは出来ないけど、時間がたてば「好き」という形になるのかもしれない。

「それでもいいさ。意識されていないより。これから、必ず好きと言わせて見せる」

「凄い自信ね」

「自信があるからね。それで提案なんだが、一緒に住まないか？君と毎日一緒の時を過ごしたい」

だから、私はあなたといたい。

「…いいわ」

また、人を好きになりたい。

ううん。

あなたを好きになりたい。

もしかしたら、あなたの言うように、あの場所で私は待っていたんじゃないくて…

探していたんだね。

“あなた”という幸せを…。

見つけられて良かった。

だってこんなにも私は幸せでいるんだから。

でも私は欲張りだから、もっともっと幸せになりたい。

だから探しに行こう？

幸せを、あなたも一緒に…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1291u/>

---

幸せさがし

2011年6月24日07時14分発行